

# I . 2006 年度活動報告



# 「ボランティア情報システム (VIS)」の登録及び閲覧の状況について

明治学院大学ボランティア情報システムは、本センターによせられたボランティア情報をインターネットで発信することで、ボランティア情報アクセスの利便性を高めることを目的としたシステムであり、文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム」の支援を受け、2005年4月から稼働している。



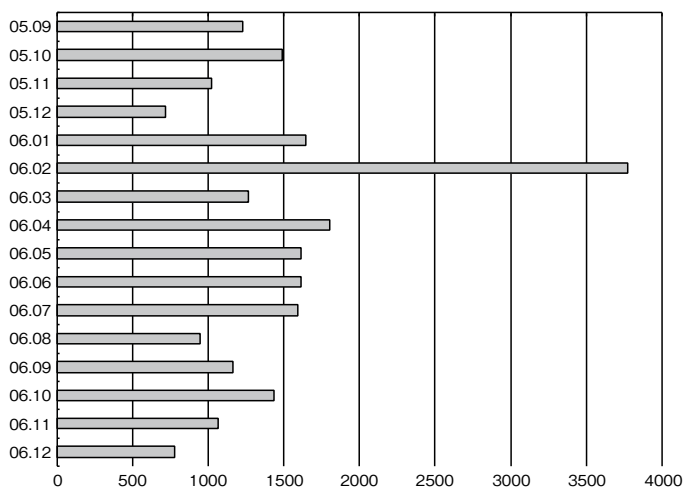
## 1. VIS 団体登録の現状<sup>1</sup>

- ①登録団体数：108 団体
- ②登録団体の所在地：神奈川県 50 団体、東京都 43 団体、千葉県 3 団体、その他 12 団体
- ③登録団体の種別：NPO 法人 39、社会福祉法人 29、財団法人 8、市民団体 7、地方自治体 5、教育機関 5、その他 15
- ④登録団体の活動分野：障がい者 41、子ども・青少年 36、国際協力 23、高齢者 23、教育 17、(複数選択可)<sup>2</sup> 環境 14、町づくり 11、子育て支援 10、NPO 育成 7、異文化交流 6、在日外国人・難民支援 5、医療・保健 5、祭り・イベント 3、スポーツ 3、女性 2、災害 2、平和・人権 2、心理 2、消費 1、音楽・美術・芸能 1、路上生活支援 0、動物 0、ソーシャルベンチャー・コミュニティビジネス 0

## 2. 閲覧状況 - VIS トップページカウンタより (2005年9月～2006年12月)

右のグラフはボランティア情報システム (VIS) の月別閲覧状況を示したものである。2005年9月からカウンタで閲覧状況の調査をはじめ、2007年1月18日現在 23,712 カウント。月間の平均カウント数は 1563 件で、1日平均約 52 件である。

(市川)



<sup>1</sup> 2007年1月18日現在の数字である。

<sup>2</sup> この項目での分類はすべて登録団体の申請による。

## ボランティア系サークル・グループへの支援 ——支援体制の整備と課題

ボランティアセンターでは、ボランティア活動の充実と活性化をめざし、ボランティア系サークル・グループへの支援をおこなっている。2001年にはじまり、ボランティアセンターの看板行事として定着している「ボランティア系サークル合同説明会」（学生スタッフ主催）に加え、今年度は支援の充実を目指していくつかの取り組みをおこなった。はじめに、ボラン

ティア系サークルがおこなうプロジェクトへの協力体制の整備である。学内の環境改善をおこなうサークル、エコキャンパスミーティングが企画した「机のなかのゴミ拾いしませんか」プロジェクトや、ベトナムやミャンマーの子どもたちへの教育支援をおこなうサークル、ジュンコアソシエーションが横浜校舎図書館で開催したベトナムのジュンコスクールの子どもたちを紹介する写真展「響き～僕らがみた教育」の実施にあたって、ボランティアセンターが



「机のなかのゴミ拾いしませんか」の活動風景

広報面で協力したり、学生スタッフが参加したりすることで、活動の広がりや活性化がみられた。次に「ボラセンギャラリー」の設置である。これは、横浜キャンパスのボランティアセンター内にある掲示スペースを公認サークルの活動を紹介する場として提供するもので、横浜キャンパスに活動拠点をおくジュンコアソシエーションが、2週間にわたってベトナムとミャンマーの活動紹介をおこなった。最後に、大学公認サークル以外のボランティアグループへの支援である。ボランティア活動は、自ら気づいた社会的課題に対して行動をおこすことが活動の出発点であるが、こうしておこったボランティアグループは活動年数が浅いため、大学の公認サークルとして認められず、活動を広めるために必要なチラシの設置、教室や



12月にはじまったボラセンギャラリー

広報用の立て看板等の使用が制限されており、新しいボランティア活動やグループが学内で安定的に成長していくにあたっての環境整備が課題となっていた。このような現状への対応策のひとつとして、本センターで活動支援をおこなっている「ソニーマーケティング学生ボランティアファンド」及び「ボランティアファンド学生チャレンジ賞」で選定されたボランティアグループに関しては、活動の広報や活動をおこなう教室使用について、ボランティアセンターがサポートをしていく方針が確認された。また、

それ以外のグループに対する環境整備に関しては、公認サークルの認定と支援全般をおこなっている学生部とボランティアセンターとで引き続き検討をすすめていくことが確認された。

(市川)

## 団体登録説明会について

本学では約 12,000 人の学生が様々な専門分野で学んでいるが、ボランティアセンター（以下、センター）が実施した学生の意識調査から、学生たちのボランティアに対するニーズや考えが明らかになってきた<sup>1</sup>。センターではこのような学生たちのニーズに基づき、学生たちに①より具体的で的確なボランティア情報を提供する、②安全かつ豊富なボランティア情報を提供することを目的に、2006 年 4 月から、白金校舎・横浜校舎の両センターにおいて月に 1～2 回の「団体登録説明会」の開催及び登録システムを開始した<sup>2</sup>。センターで学生に提供しているボランティア情報は、この「団体登録」手続きが済んだボランティア団体と、ボランティア情報検索システム<sup>3</sup>に登録されている団体に限っている<sup>4</sup>。2007 年 1 月現在、団体登録を済ませているボランティア団体は、175 団体である。ボランティア情報の提供を希望するボランティア団体には、登録のため来校を依頼している。時にそれが負担になり、団体が登録を見送るなどのデメリットも懸念されるが、それ以上にセンターとボランティア団体にとって得られるメリットも多いと考え、現在はこの方法を続けている。ボランティア団体に直接来校していただくことによる、双方の具体的なメリットは、主に 5 つ考えられる。

第一に、説明会で明治学院大学におけるセンターの機能と役割、誕生の歴史、センターの事業内容、当センターで定めている「ボランティア情報の取り扱いに関する方針」<sup>5</sup>、本学の学生のボランティアニーズや傾向などを、団体に直接伝えることができるため、団体が当センターと学生についてよく理解した上でボランティア情報を預け、学生をボランティアとして受け入れられると考えている。第二に、ボランティア団体から直接団体説明やボランティア募集情報を聞かせていただけるので、センターにボランティア相談に訪れた学生に、具体的で的確にボランティア情報を伝えることができると考えている。第三に、「顔の見える関係」に基づいた、センターとボランティア団体とのよりよい関係作りにつながることを期待している。第四に、センターから団体へ、ボランティア保険加入の確認の協力依頼ができる点である。センターではボランティア保険の加入を学生に義務付けているが、全ての学生がボランティアをするわけではなく、全学生に加入を強制することはできない。しかも現在直接マッチングを行っていないため、学生がどの団体へどれくらいボランティアとして参加しているのか把握できない。そこで、団体登録に来ていただいた団体へ「本学の学生がボランティアをしたいと訪ねてきたら、ボランティア保険に加入しているか確認してください。まだの場合は加入するように、加入方法などが分からない場合はボランティアセンターを訪ねるように伝えてください」と、説明会でお願いしている。最後に、直接来校していただくことによってボランティアとは関係のない、悪質な団体を排除できる効果があると考えている。

<sup>1</sup> 詳しくは本書「Ⅱ. ボランティア調査」を参照。

<sup>2</sup> 登録方法と手続きの流れについては、表 1 を参照。

<sup>3</sup> 通称 VIS、詳しくは本書“ボランティア情報システム「VIS」の登録及び閲覧の状況について”参照。

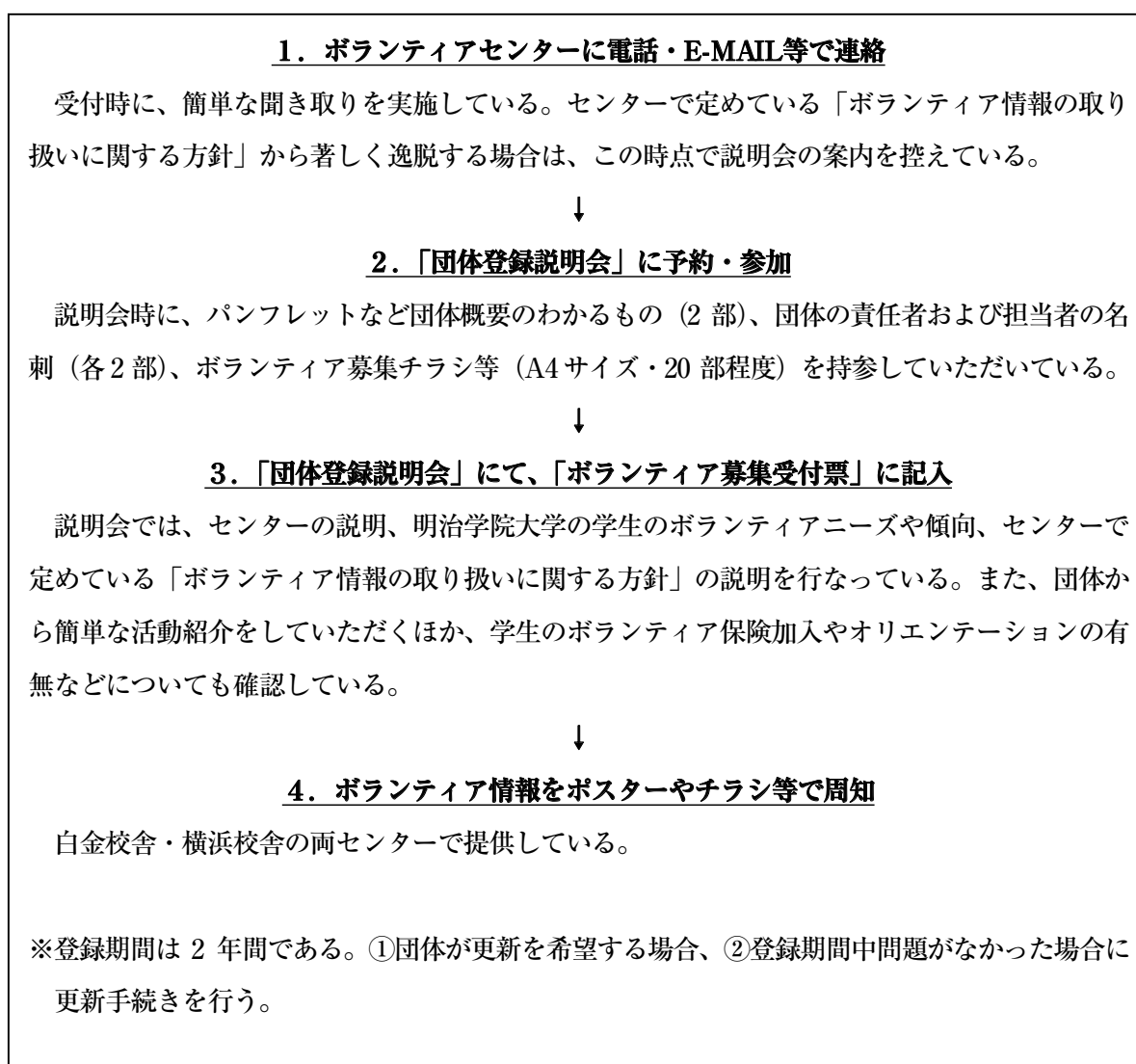
<sup>4</sup> 各地域の社会福祉協議会が発行しているニューズレターに掲載されているボランティア情報は除く。

<sup>5</sup> 詳しくは、本書「Ⅳ. 資料」の“ボランティア情報の取り扱いに関する方針”を参照。

以上の理由から、現在のところ、この方法でボランティア情報を集めている。しかしながら、①手続きがセンターにとっても団体にとっても煩雑、②ボランティア情報を受け取るだけの受身の姿勢からボランティア情報を仕入れに行く姿勢への脱却、などの課題もある。豊富なボランティア情報の常備と、ボランティア団体とのネットワークの構築は、センター運営の根幹にあたり、全ての明治学院大学に在籍する学生たちの日常のボランティア活動支援につながる重要な業務である。今後はこれらの課題の解決方法を模索しつつ、更に充実したセンター作りを目指していきたいと考えている<sup>6</sup>。

(李)

表 1. 2006 年度団体登録方法と手続きの流れ



<sup>6</sup> これらの課題を解消する一案とし、単発ボランティア（行事・イベントなど）については、手続きを簡略化し、受け付ける方法を開始した。

## 「国際交流・協力機関 体験・研修プログラム」

— 100 時間ボランティアを通じた次世代育成と人的交流を基盤とした連携の意義

「国際交流・協力機関 体験・研修プログラム」は 2005 年 3 月より明治学院大学ボランティアセンターと（財）横浜市国際交流協会（以降、YOKE）が取り組みをはじめた大学の長期休暇を利用した 100 時間ボランティアプログラムである。今回で 5 期目をむかえる本プログラムを通して、本センターよりこれまで 6 機関に計 15 人の学生が派遣され、さらに 2006 年 3 月以降は横浜市内にキャンパスをもつ横浜国立大学、フェリス女学院大学、横浜市立大学もプログラムに加わった【表 1】。主旨や経緯については、「ボランティアセンター報告書（第 1 号、第 2 号）」で紹介されているので省略し、本稿では次世代育成の観点からみた本プログラムの意味と課題、そしてこのような人的交流を基盤にした組織間連携の意義と課題について報告したい。【表 1】<sup>1</sup>

受け入れ機関	04 年春期	05 年夏期	06 年春期	06 年夏期	07 年春期
国連食糧農業機関 (FAO)	1 (MG)	1 (MG)	1 (YN)	1 (MG)	1 (F)
国連 WFP 協会	1 (MG)	1 (MG)	1 (F)	1 (F)	1 (MG)1 (F)
横浜市国際交流協会 (YOKE)	1 (MG)	1 (MG)	1 (MG)	1 (MG)	1 (MG)
国連大学高等研究所 (UNU-IAS)			1 (MG)1 (F)	1 (F)	1 (MG)1 (YC)
横浜日仏学院			1 (MG)1 (YN)	2 (YN)	1 (YN)
JICA 横浜				1 (MG)	
アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター				1 (YN)	1 (YN)

### 1. 100 時間ボランティアの意味と課題

「活動した学生にとって 100 時間ボランティアは、どのような意味をもつのだろうか」という視点で明治学院大学ボランティアセンターに提出された「活動報告書」に記載されている学生からのコメントの整理をおこなった。学生からのコメントは 4 つの観点に大別される。第 1 に、自らのボランティアとしてのかかわりが、機関やそのミッションに貢献できたと実感できた<sup>2</sup>という、国際貢献、社会貢献への意義を報告するものである。第 2 に、国際交流や国際協力の理念や精神への気づきを報告するものである。YOKE で活動をおこなった学生は、「ネットワークの重要性」「母国文化への理解」「人による国際交流」というような国際交流・協力分野の精神的支柱への理解を深めていた。第 3 に、国際協力にかかわる仕事への理解である。学生は、途上国で活動をすることが国際協力だと理解しがちであるが、「裏方の仕事が現場を支えていることを実感した」(J)<sup>3</sup>「さまざまな仕事とともに協力し合って貧困をなくし、世界平和を目指しているということを知った」(F) というように、これまで気づかない観点から国際協力活動への理解を深めていった。最後に、自らの仕事観の形成である。「仕事について、マイナスイメー

<sup>1</sup> 表中の MG は明治学院大学、F はフェリス女学院大学、YN は横浜国立大学、YC は横浜市立大学をさす。数字は派遣者数を表す。例えば、04 年春には国連食糧農業機関 (FAO) に 1 名の明治学院大学生が派遣された。

<sup>2</sup> 例えば、日仏学院で活動をした学生は「フランス文化のかけ橋になるお手伝いができるようになった」と最終報告会でレポートしている。

<sup>3</sup> 文中の F は FAO、J は JICA 横浜、U は国連大学、Y は YOKE をさす。

ジからプラスイメージになった」(Y)「国連大学のフェローは次のステップを常に意識していた。自分も大学で学ぶこと、将来の計画をきちんと立てたいと思った」(U)というような仕事やキャリア設計について意識を深めることができた、という指摘である。

以上、参加学生からの報告を簡単にではあるがまとめた。100時間という限られた時間での活動であるが、学生の報告から本プログラムが「次世代を担う青年層に対し、国際協力や多文化共生に向けて資質と行動力を育み、勉学や市民活動へ寄与する」というねらいを達成しているといえよう。

## 2. 人的交流を基盤とした連携の意義と課題

本プログラムでは、学生の派遣と受け入れを通して、大学、YOKE、国際機関が相互に連携している。この人的交流によって生じたさまざまな機関への影響や効果を YOKE が回収した「評価シート」<sup>4</sup>からみていきたい。第1に学生の参加及び活動が受け入れ機関に及ぼした影響について、「ボランティア学生が呼びかけることで、シンポジウムの参加者が増えた」(Y)「学生が国際機関にどんな意識をもっているのか知ることができ、刺激をうけることができた」(F)「JICA が主催した講座やフォーラムへのボランティア学生の積極的なかわりが、他の参加者に良い影響を与えている」(J)「活動が終了してからも学生が継続して機関の活動に関わることで、受け入れ担当部署だけでなく、他の事業へも受け入れの効果が波及している」(J) 等と回答しており、活動期間中もしくは活動後に各機関の活動にポジティブな影響を与えていたことが分かる。さらに、学生たちを受け入れることで、貴機関の事業に何らかのプラスの影響を与えることができたかという設問に対して回収された12サンプルのうち、1サンプルを除く11サンプルが「とてもあった」という評価をしていた<sup>5</sup>。第2に国際機関と大学が連携する意味について考えてみたい。「大学生に国際協力の現場を知らせ広められる機会を効果的に得られている」(F)「大学で人選された学生が参加するプログラムだけあって、参加学生は意識がたかく意欲的に取り組む姿勢に好感がもてた」(Y)のように、大学機関がプログラムの企画とコーディネートをおこなう国際協力に対する理解と関心を広げる取り組みに対する評価が高いことが分かった。第3に大学とYOKE が連携する意義を「大学が異なる学部の学生を派遣していること」「目的や趣旨に適したボランティア活動や国際協力活動に関心が高い学生を各機関が受け入れられること」、「活動中や活動後のフォローアップが可能であること」に各機関が見出していることが報告されていた<sup>6</sup>。最後に大学間連携の意義としては、「異なる環境と専攻の学生とともに学ぶことで、刺激を受け成長した」<sup>7</sup>と参加学生が報告しているように、参加大学が各々の教育方針を持ちながらも相互の優れた点を学びあう機会として協力関係を築く意義が挙げられる。一方、複数の大学、中間支援組織 (YOKE)、国際機関が連携するこのような形のプログラムは先行事例が少なく発達途上段階であり、各大学の送り出し担当部署が学部、

<sup>4</sup> 学生を派遣した機関から YOKE が回収した「評価シート」(プログラム開始の2005年春期～2006年夏期の実施分)

<sup>5</sup> 1機関は「ふつう」と評価。

<sup>6</sup> 2006年「明治学院大学ボランティアセンター報告書第2号」にて、YOKEの村井氏が指摘。

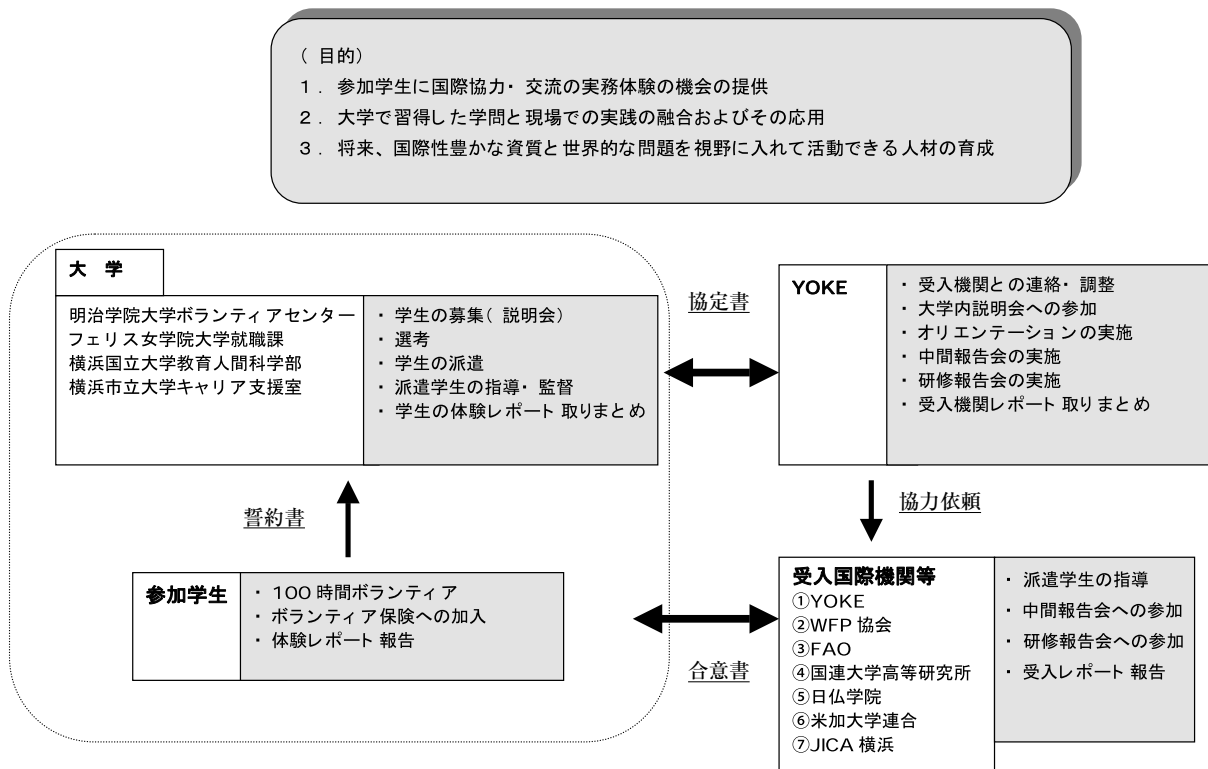
<sup>7</sup> 参加学生より回収したアンケート(国連大学高等研究所で活動)より

就職課、ボランティアセンターと多岐にわたり、異なる期待をもってプログラムに関わっているなかで、目的を共有し充実したプログラムを構築していくことが、課題となっている。

(市川)

【図】「国際交流・協力機関体験プログラム」関係機関の役割

2007年1月 YOKE 作成



## 海外ボランティアプログラムについて

### 1. はじめに

2006年5月～2006年12月にかけて、ボランティアセンターでは新規プロジェクトとして「海外ボランティアプログラム (Meiji Gakuin Overseas Program, 以下 MOP)」を企画・実施した。具体的には、本学の学生を海外3カ国の大学へボランティアとして派遣し、海外協定校(2校)の学生をボランティアとして受け入れた。また、外国人学生を受け入れるにあたって、「ボランティア活動バディ (以下、ボラ活バディ)」という制度を設け、参加学生を募った。本プログラムは、社会の抱える様々な課題について、国境や文化的背景を越えた同世代の大学生たちがボランティアという立場から共に取り組み体験することにより、学生たち自身の手で学びを創造する機会を提供し、支援することを目的とした。プログラムには事前学習・準備が含まれ、ボランティア活動後の報告会では、①海外へ派遣したボランティア学生、②海外から派遣された外国人ボランティア学生、③外国人ボランティア学生と共に日本でボランティア活動に参加した学生、という3つの視点から発表し、報告書の提出をもってプログラム終了とした。これらのプロセスを経験することによって、参加学生たちが、体験と学びを自分のものとして具現化し、内外へ広く還元する機会を得ることが期待できると考えた。

### 2. 事前オリエンテーション、派遣・受け入れ期間

#### (1) 海外派遣プログラム (表1参照)

派遣学生は6名(男子1名、女子5名)で、3年生4名、4年生2名、所属は経済学部2名、法学部2名、文学部と社会学部がそれぞれ1名だった。募集にあたって説明会を実施し、応募受付、書類選考、面接を経て6名の学生を決定した。ボランティアセンターでは、派遣学生に対し、事前に2回オリエンテーションを実施した。内容は、①学生全員による英語の自己紹介プレゼンテーション、②一人50wordsのボランティア活動に関する英単語を持ち寄って単語帳を作る作業、③旅行会社によるオリエンテーションである。帰国後、6名全員に対して①ヒアリング、②アンケート調査を実施し、中間評価を行った。結果、全ての学生がオリエンテーションについて、「回数は適切だった」(全2回)と答えた。内容に関して、6名中5名が「役に立った」と答え、1名が「どちらともいえない」と答えた。肯定的な意見では、①ボラセンスタッフに相談できる人がいること、②課題があったおかげで目的意識が明確化した、③英語での自己紹介準備が日々のコミュニケーションで役立った、といった内容が挙げられた。否定的な意見には、①事前の情報不足(現地でのボランティア活動内容、必要な物、準備物)、②業務としての現地との事前やりとりの負担、が挙げられたが、逆に事前にやりとりできてよかったと答えた学生もいた。その他のマイナス評価としては、「テスト期間を避けた方がいい」、「派遣前にもっとスケジュールが分かった方がいい」、「オリエンは全て白金校舎で」、「滞在する寮の設備についてもっと情報が欲しかった」といった意見があった。大学別の受け入れに関しては、学校によってプログラムに対する意識や捉え方に差があることも浮き彫りになった。また、ボランティ

ア活動の内容や質が著しく違うなどの状況も明らかになった。また、ボランティア活動だけではなく、食事環境、PCや電話などの連絡環境などにもばらつきが見受けられた。このようにボラセン側の不手際や、現地でのサポート不足やプログラムが不十分な環境で大変な思いをした学生もいたが、それらを乗り越えて自分なりの充実感を見出し、自身の積極性、自主性を伸ばすなど大きな成長を遂げており、全体的に学生たちは「ほぼ満足」と回答した。またプログラムに参加したことによって海外留学を決めたり、将来像が具体化したと話す学生もいるなど、学生たちに与えた影響は一過性のものだけではなく長期的なものも含まれていた。今後の課題として、大学間のコミュニケーションと相互理解の促進、プログラム内容のある程度の標準化の達成、派遣前・派遣後の学習プログラムの充実など、更なる改善が必要であることが明らかになった。

## (2) 日本受け入れプログラム (表1参照)

今回、イギリス・レスター大学から2名、カナダ・サイモンフレーザー大学から2名の計4名を受け入れる予定だったが、最終的に来日したのはサイモンフレーザー大学からの1名であったため、本学正規留学生であるフィリピン大学の交換留学生を含めた合計2名を外国人ボランティア学生としてプログラムに迎えることになった。彼らと共にプログラムに参加するボラ活バディの参加者は13名(男子4名、女子9名)で、1年生4名、2年生3名、3年生4名、4年生2名だった。所属は、国際学部4名、法学部3名、文学部3名、社会学部2名、経済学部が1名だった。募集にあたって説明会を実施し、希望者全員の申し込みを受け付けた。ボランティアセンターでは外国人学生・ボラ活バディ用に、「Orientation」、「Schedule」、「Participants」などの英文資料が入ったバインダーを用意して配付した。ボラ活バディには事前に2回オリエンテーションを実施した。第1回オリエンテーションでは、希望するボランティア先別にA、B、Cの3グループに分け、各グループでオープニングセレモニー、クロージングセレモニー、その他外国人学生とのワークショップなどの企画やボランティア先の英文資料作成などの役割分担を行った。第2回オリエンテーションでは、グループ別に準備した内容をプレゼンテーションし、全体でディスカッションを行った。作成した英文資料はボランティアセンターで印刷し、参加者全員に配付した。しかし残念ながら来日したカナダ人学生は事情により8月の上旬で帰国してしまった。それによって当初、ボラ活バディの大半が期待していた「外国人学生とボランティアをしながら英語でコミュニケーションできる機会」が失われてしまった。更に、ボランティア内容も期待と反していたり予想外の困難に直面したため学生たちのクレームが殺到し、クロージングセレモニー以降の報告会実施・報告書作成は絶望的だと思われた。しかしクロージングセレモニーには、ボラ活バディ全員が参加して率直な意見交換を行った。そこでは、プログラムやボランティアセンターに対する不平不満だけではなく、葛藤や困難を通じて自分が得たもの、見えたものを率直に語る彼らの眩しい姿があった。具体的には「グループワークで“ボランティアって何？”っていうディスカッションをやった時、皆の意見を聞いてとても刺激を受けた」、「今まで環境に興味なかったけど普段の生活でも電気をマメに切ったりタンブラーを使ったり、環境問題について調べたりするようになった」、「立てた企画や作った英文資料を披露する場はなかったけど、いい勉強になったし無駄じゃな

かったって思ってる」、「葛藤や悩みは辛かったけど、色々考えさせられるきっかけになった。一緒に頑張ったボラ活の仲間には本当に助けられたし出会いに感謝している」、などの声が挙がった。そして彼らは「今回の葛藤、それを通じて学んだことを発表したい」という思いから、報告会まで参加する決意をした。

### 3. 報告会・報告書

報告会は11月22日、白金校舎で行われた。参加学生（日本人）19名中、プレゼンテーション経験がない、パワーポイントを使用したことのない学生が全体の7割を占めていたことから、予演会を設定してブラッシュアップを図った。予演会は4回実施し、学生同士積極的に意見交換を行った。当初やる気にバラつきがあったが、予演会を通じて「他の学生のプレゼンテーションから刺激を受けてやる気が復活した」と話す学生が続出し、指定時間内でのパワーポイント・発表原稿作成などの技術的な相談及び、自分が何を伝えたいのか、それをどう言語化していくのかといった内容的な相談のため、頻繁にボランティアセンターを訪れたり、メールで相談を寄せるようになった。司会は、唯一の外国人参加者のフィリピン人留学生が担当することになり、原稿の準備及び発音アドバイスをボランティアセンターで行ったが、彼は非常に熱心に練習に取り組んだ。その甲斐あって、報告会では全ての発表が時間内に終了し、来場者アンケートからも「学生が伸び伸びと率直にボランティアを語る姿に感動」という声を多数いただいた。また来場した明学生からも「明治学院でこんなにボランティアをしている人がいることを知ることができてよかった。友達（参加者）がこんな経験をしていることにビックリし、自分も機会があれば何か参加したいと思いました」といったコメントも寄せられた。また、ボランティアやプログラムに関して批判的だった司会の留学生も、参加学生たちのプレゼンテーションに触発されて最後にアドリブで今回の自分の感想を日本語で話し「ボランティアって素晴らしいよ」と締めくくり、会場は大いに湧いた。このように、報告会の準備から発表の過程で新たな学びを得た参加学生たちは、それらの集大成として最終ステージである報告書を執筆した。報告書は1月16日に完成した。学生たちはお世話になったボランティア先へ報告書を送るなど、最後までしっかりとプログラムを遂行してくれた。

※報告会・報告書の詳細については、ボランティアセンター発行「MOP2006 報告書」参照。

### 4. まとめ

今回のボランティアセンター側の不手際については真摯に反省し、来年度以降に必ず改善するつもりである。前半はトラブル続出であったが、一人のリタイアもなく本学の学生たちがそれぞれの「学び」を見つけ出し、やり遂げることができたのは、彼らの底知れぬガッツと能力あってこそだったと確信している。時折、明学生は消極的であるという声を聞くが、今回の経験からその偏見が鮮やかに覆ったことは、ボランティアセンターにとって大きく嬉しい収穫だった。このような素晴らしい明学生たちのために、来年度は更に充実したプログラムを作っていきたい。本プログラムは2007年度も実施予

定である。

(李)

表 1. 海外ボランティアプログラム (MOP) 2006 の概要

	海外派遣学生	受入れ学生(外国人)	ボラ活バディ
参加人数	アメリカホープカレッジ (協定校)、イギリスレスター大学 (協定予定校)、カナダサイモンフレーザー大学 (協定校) へ各2名	カナダ:1名 フィリピン:1名 (長期留学で日本滞在中)	13名 (日程や活動の希望によってA、B、Cグループに分割)
プログラムの流れ	説明会:5/29、5/30 (両校舎) 応募期間:6/5~7 書類選考:6/8 書類合格者発表:6/12 面接:6/24 (白金校舎) 派遣学生発表:6/26 第1回オリエン:7/10 (白金校舎) 第2回オリエン:7/28(横浜校舎) 派遣期間:8月~9月 (3週間から4週間) 帰国後ミーティング:9/28 (白金校舎) 報告発表会:11/22 (白金校舎) 報告書提出:11/30		説明会:6/12、13 (両校舎) 応募期間:6/12~16 第1回オリエン:7/1 (白金校舎) 第2回オリエン:7/26 (白金校舎) 派遣期間:8月 (グループによって、2日から1週間) プログラムオープニング:8/4 (白金校舎・記念館) プログラムクロージング:8/28 (白金校舎・記念館) 報告発表会:11/22 (白金校舎) 報告書提出:11/30
事前準備内容	英語でのプレゼン発表会 ボランティア関連用語集作成(300単語)		グループ別に、ボランティア先について英文資料作成・外国人学生と行うワークショップの企画と準備
主なボランティア内容	アメリカ:ホームレスの方へのフードサービス、高齢者施設での話し相手(2カ所) カナダ:聴導犬訓練所清掃、サッカースタジアム誘導係 (2カ所) イギリス:ゴミ収集、耕作、本の整理、小旅行付き添い等 (6ヶ所)	※カナダから来日した学生は事情によりプログラム途中で帰国。今回は全日程に参加した外国人学生はいない。	(特)ソフトエネルギープロジェクト:地球温暖化防止に関する英訳、イベント補助等 (A、B) 横浜市ボランティアセンター:館内見学・グループワーク (C) ※機関紙とHPに様子が掲載、(社)興望館:児童館での遊びのボランティア (C)
報告会 11/22 白金	派遣先大学ごとに2名で発表。発表時間12分、質疑応答3分、パワーポイント使用。	フィリピン人学生が日本語で司会進行。	グループ毎に発表。グループCはフロアと一緒にワークショップ実施。
報告書 1/16 発行	全員提出。 (執筆規定あり)	提出なし。 (執筆規定なし)	13名中12名提出。 (執筆規定あり)

# スマトラ沖津波支援タイ・スタディツアーとフォーラムの開催

—明治学院大学とタマサート大学との連携による活動

## 1. はじめに

ボランティアセンターでは2004年末におこったスマトラ沖津波支援として、タイ・バンコクに位置する協定校タマサート大学と南タイの被災地パンガー県タブタワン村を訪問し、本学生10名がボランティア活動をおこなうタイ・スタディツアーを2006年8月に実施した。2005年度に続き二回目の実施である。また、タマサート大学の教員や被災地南タイでの復興支援にあたっているNGOスタッフが復興支援の現状と課題を発表し、タイ・スタディツアー参加者が被災地でのボランティア活動報告をおこなうフォーラム「スマトラ沖津波その後を考える」を11月に開催した。

このプロジェクトの目的は、以下の通りである。(1) タマサート大学と明治学院大学がスマトラ沖津波支援における、学生ボランティアの意義と課題について知識や経験を交換し、相互に学び合うことで、復興支援活動の充実をはかること。(2) 少数民族（モーケン族）が居住し、復興が遅れがちな地域（タイ、パンガー県タブタワン村）の子どもたちと遊ぶボランティアをおこなうことで、村や子どもたちに心理的サポートをおこなうこと。(3) タイ・スタディツアー参加者がタマサート大学にて、日本の自然災害への取り組みと明学生のボランティアを紹介することで、参加学生が日本の自然災害への取り組みについて理解を深めるとともに、日本の防災システムや自然災害に関する備えを日本国外へ発信する主体的なプログラムづくりをおこなうこと。(4) タイ・スタディツアー事前オリエンテーション等において、ボランティアセンターのファシリテーション<sup>1</sup>によって学生の自発性を引き出し、創意と工夫のあるボランティア活動を展開すること。(5) 第1回タイ・スタディツアーの参加学生がリーダー的存在として、今期のスタディツアーにも加わることで、活動先の様子やこれまでの活動の成果と課題を今期の参加学生に引き継ぎ、効果的な活動を目指すとともに、継続学生にとってはボランティア活動におけるリーダーシップのあり方について、学ぶ機会とすること。(6) タイ津波復興支援にかかわる大学、NGO、学生ボランティアが連携して、フォーラム「スマトラ沖津波その後を考える」を開催し、被災地の現状及び復興支援の現状と課題を広く発信することで、スマトラ沖津波に対する関心を高め、効果的な支援の継続を目指すこと。

## 2. 事前の取り組み

本プロジェクトの実施にあたり、筆者は2つの視点から事前準備のプログラムづくりを進めた。一つの視点はオリエンテーションを通してコーディネーターがプログラム参加学生に積極的にはたらきかけていくことである。活動先となるタブタワン村の社会的背景や復興の現状と課題について学ぶ機会を提供し、加えて、活動づくりのポイントや熱帯性気候のもとで活動をおこなう際のリスクマネジメント

<sup>1</sup> グループが目標を達成できるように体系的に目標達成に向けたプロセスの構築と管理をおこなうこと。

についてレクチャーをおこなった。もう一つの視点は学生自身がボランティア活動を組み立てるためのファシリテーションである。村の様子や活動先となるタイの NGO 子ども財団<sup>2</sup>からのニーズの連絡、情報提供、活動づくりのポイントをコーディネーターから学生に伝えた上で、その情報をもとにどのような活動を作り出すかについては、学生の視点が発揮されるように支援をおこなった。この方法は与えられた活動をこなすのではなく、学生自身が支援の内容と方法をさぐり、実現させる活動として効果的であったと考えている。また前回参加した学生が引き続き参加しリーダーシップを発揮したことにより、学生たちで考える環境を整えることができたことも効果的であった。

### 3. 第2回タイ・スタディツアーの概要と活動

#### (1) スケジュール

8月18日	タマサート大学にて ・Dr.Prinya によるレクチャー「スマトラ沖津波における大学生のボランティア」 ・明学生によるプレゼンテーション「日本の自然災害と明学生のボランティア」 ・日本語学科生との交流（タイ社会、文化への理解を深める）
8月19日	被災地南タイ（プーケット及びパンガー県タブタウン村）にて ・被災地（タイで一番大きな津波が押し寄せた場所）の見学 ・児童館でのボランティア －紙芝居「猿蟹合戦」、歌（日本とタイの童謡など）、サッカー、大縄飛びなど
8月20日	被災地南タイ（パンガー県タブタウン村）にて 児童館でのボランティア－手のひら絵など
8月21日	タマサート大学にて ・津波ボランティアに参加したタマサート大学生とディスカッション ・フェアウェルパーティー

#### (2) タブタウン村の現状と学生によるボランティア活動

活動をおこなったパンガー県タブタウン村は「モーケン族」という少数民族が多く住む地域である。この民族は「シージブシー」と呼ばれ、かつては海の上で生活をしてきたが開発が進み自由に海の上を移動できなくなったため、近年では定住して漁業を営んでいる。この村の周辺地域では津波後の混乱状況のもとで資本家たちが村の土地を占領し土地所有権を主張しているため、モーケン族たちとの間で裁判が起こっている。「村の子どもたちに日本の遊びを教えてほしい」と活動の受け入れ先である子ども

<sup>2</sup> 子ども財団（FFC: Foundation for Children）はタブタウン村に児童館を設立し、親を亡くした子どもたちや、生活再建のために子どもたちの面倒を見られない家庭の子どもたちのケアをしている。また1日1回栄養バランスのとれた食事を提供することで、健康に子どもが育つよう支援活動もしている。

財団から話があり、学生たちは昨年に引き続き子どもたちとの遊びのボランティアの準備をすすめた。紙芝居「猿蟹合戦」をタイ語で子どもたちに見せたり、日本の伝統的な遊びである大縄飛びで一緒に遊んだりした。タイ語版の紙芝居「猿蟹合戦」は「子ども国際図書館」で入手し、タイの民謡「ロイクラトン（灯籠流し）」、「ぞうさん」のタイ語歌詞は、タイ大使館から取り寄せるなど、タイ文化により添った支援がおこなえるよう工夫した。また、参加学生の一人である心理学科生のアイデアからおこなった手のひら絵は、手のひらに絵の具をつけた手で子どもと学生が握手をして絵の具を混ぜ合わせ、大きな布に手形でアートを製作する活動である。発案した学生は「日本カウンセリング学会」のワークショップで描画を用いたカウンセリングを知り、悩みや心の辛さ、悲しみを発散させる「カタルシス効果」が得られやすい活動として、タプタワン村での活動に適しているのではないかと考え、提案した。この活動



子どもたちと学生とで大縄飛び



絵の具をつけた手でアートの製作（手のひら絵）

について、参加学生は以下のように表現している。「手のひら絵の活動では、顔や体にも絵の具をつけ合っ  
て、肌と肌とが触れ合い、言葉が通じずとも子どもたちと本気でぶつかりあうことができた。そして今  
までやったことがない遊びという新鮮さが子どもたちの興味を引きつけ、楽しんでもらったことで、津  
波により子どもたちが受けた心の辛さや悲しみなどを少しでも癒せたのではないかと思う。私たち自身  
も心から活動を楽しめたことで、ボランティアをする側、される側など、枠にとらわれない対等な立場  
で活動をすることができたと感じている。」

タイ・スタディツアーのまとめとして、最終日のミーティングである学生は「去年は子どもたちに“やっ  
てもらおう”活動だった。しかし今年子どもたちが“やりたくてしょうがない”と思わせることができ  
た活動だった」と語った。筆者もコーディネーターとして2回プログラムを企画し引率をしたが、昨年  
は村を訪れた際に、ボランティアをおこなう環境づくりや子どもたちとの関係づくりにコーディネ  
ーターが関わっていく場面が多かったが、今年学生自らが村の子どもたちとコミュニケーションをとり  
活動を展開していったという大きな成長がみられたことを実感した。これは活動を継続し、村の子  
どもとの関係が醸成された大きな結果として生まれてきたからだといえる。また前回参加学生がリー  
ダーシップを発揮し、子どもたちとの関わりや活動を準備する際のポイントがスムーズに他の参加学生に伝

わった効果ともいえる。

タイ・スタディツアーの参加メンバーは、子どもたちや子ども財団のスタッフから「来年も来てくれるの？」というメッセージを何度も受け取った。たくさんの人々が訪れた津波直後に比較して、今年になって村を訪れる人は激減し「まるで忘れられているようだ」と、村の人々は肩を落として語っていた。今回、参加学生が掲げた目標の一つが「継続して活動をおこなう意義を見つめる」であり、その目標を共有した他の参加学生も継続してボランティアをおこなう意味について、深く考えるようになっていった。遊びを通して構築された子どもとの関係の熟成が継続の成果としてうかがえ、学生たちによる遊びのボランティアが村で継続的に活動をしている子ども財団や子どもたちからも、受け入れられ求められるものにまで大きくなっていった。

#### 4. タイ・スタディツアーのまとめとフォーラム「スマトラ沖津波その後を考える」の開催

タイ・スタディツアーを通して学生たちはボランティア活動を創り出す喜びとその成果に大きな自信をもつようになっていった。また児童館の子どもたちも全身で遊びを楽しみ、マイナスの気持ちを発散させることができ、双方が活動を通して互いを理解し、支え合う関係をつくることができた。ボランティアセンターでは、11月にタマサート大学と連携してフォーラム「スマトラ沖津波その後を考える」を開催した。津波直後に約5000人の学生ボランティアを組織し活動をおこなったタマサート大学教授プリンヤ先生、現在もタブタウン村周辺で支援活動を続ける日本国際ボランティアセンター（JVC）の堤氏に講演をおこなっていただき、ボランティアセンターのコーディネーターとタイ・スタディツアー参加学生からの活動報告をおこなった。当日来場した約90名の方たちは、真剣な眼差しで聞いていた。フォーラム終了後には、スピーカーと熱心に語りあう姿が会場のいたるところでみられ、来場者からのアンケートにはフォーラムの内容に高い満足感がよせられた。スタディツアー終了後も、参加学生たちは活動を継続している。子どもたちへの支援に関心を抱き、東南アジアでストリートチルドレンの支援をおこなっているNGOで活動をはじめた学生、国内の児童問題に取り組みたいと児童福祉の分野に進むことを決めた学生など、参加者がスタディツアーでの経験を生かして、子どもや国際協力をキーワードとして活動を継続している。また参加メンバー全員での取り組みとして、南タイでの津波の取材にあたった新聞社のカメラマンを招いて自主勉強会をおこなったり、スマトラ沖津波の被害や支援活動の様子を取めた報道写真の上映会をおこなうなど、スマトラ沖津波と復興支援への理解と協力を広める活動はその後も継続して展開している。このタイ・スタディツアーは次年度まで続く予定であるが、この活動を通してタマサート大学やタブタウン村との絆がより一層深まり、また学生たちの活動がより充実することを強く願っている。

(市川)

# "Experiences from Tsunami & Role of Volunteers in Thailand"

*Dr. Prinya Thaewanarumitkul*

*Vice Rector for Students Affairs, Thammasat University, Thailand*

## I. Analysis of the damages from Tsunami disaster 2004 in Thailand

1. With 5395 death and 2940 missing people, Tsunami disaster has been the biggest nature disaster in Thailand.
2. Missing people means the people that could not be found their dead bodies. Therefore there were totally around 8000 people who died from Tsunami disaster in December 2004 in Thailand.
3. Within the 5395 dead bodies, there were 1917 unidentified bodies. Why so many? The reasons: First, a lot of dead people were in swimming suit or at the beaches, so that they didn't have money bag or ID card with them that could identify them. But the most important reason was a failure of identifying process of dead bodies. Personal belongings were mostly separated from the dead bodies before identifying process began. That made the process more difficult. And this is an example that shows the lack of know-how and experiences in disaster management in Thailand.

## II. Tsunami, the wave that changed Thailand

1. Thailand is not stable or safe from big nature disasters as Thai people have believed. Tsunami changed their mentality. After Tsunami attacked South-Thailand in 2004 they have to plan and look more into the future. Young people who experienced or went through this disaster would be "Tsunami Generation" in Thailand.
2. People began to realize the importance of volunteers. The Role of volunteers got more important than ever.
3. An important question: In case of disaster, will human be more selfish or will help each other? In Japanese cartoons or disaster film like "Sinking of Japan" , which I saw on the airplane to Japan, human will be more selfish. But from what I experienced from Tsunami disaster, I believe the latter one.

## III. Lessons from Tsunami disaster management

1. The first 7 days: rescuing and retrieving phase. The most difficult thing in the first 7 days was to

make decision what to be done. The situation was chaos and we had to race in unsystematic and needy condition. My lesson is: "Help ourselves and do not wait the government."

2. To cope with the problems, we have to

2.1 set priority. The most important thing was to rescue the survivors and provide them the basic necessities for living; such as water, food, drug and temporary residence.

2.2 encourage the victims to rely on themselves and to help each other.

2.3 contact the involved people, organizations, or institutes for support.

3. To deal with the volunteers at high efficiency, we have to

3.1 put the right man in the right job and use the group dynamics. Volunteers should be divided into groups with the definite mission. Each group has to reach the mission and solve the problems as much as possible.

3.2 give the volunteers opportunities to create, manage, and perform their duty by themselves.

3.3 assign the volunteers to work in the job fields they are interested. Also, we persuaded the volunteers to do their best for the undesirable jobs, encouraged them to have a 'Volunteer Spirit' and consent to do these jobs.

4. After 7 days: restoration phase.

4.1 We had time to set up 'system'. The problem in this phase was not the lack of manpower or necessities like in the first 7 days, but the way of managing the volunteers and the things. Some impact areas gained too much volunteers, while others still lacked. The resolution was to create the network in order to estimate the demand and the supply in each area, then to coordinate.

4.2 Strategy for long term resolution is: "Let the victims help themselves and rely on themselves" . 'Community' is the key for the resolution.

#### IV. How to set up "Volunteer Spirit" to the youths and encourage them to "do for others"?

1. "Volunteer spirit" does not originate from logic or at our brain, but it comes about our *heart* when we *touch the truth*. The strategy is therefore: "Let the youths *touch the truth*." Universities teach them only academics, but do not teach them the truth of life.

2. Those who know how people suffer will decrease their selfishness. This conclusion comes from my own experiences, as I was a student and went to the rural and lived with farmers for the first time.

3. An example project to let the youths *touch the truth*: In 2006 at Rangsit Campus, 42 km from the main campus in Bangkok, Thammasat University has formed *Thammasat 'Rice Planting' Project*. With this rice field, we let our students touch the truth, *how rice comes*. It is a kind of open-air class, no credit, no examination, and only learn how to plant rice.
4. Provide the public service activities for the youths. They are the great opportunities to shape up the “Volunteer Spirit” in their mind. For example, Universiade Bangkok 2007, launch at Thammasat University in August 2007, it requires around 7,000 volunteers from several universities in Thailand.

## V. Future of volunteers in Thailand

1. Volunteer center for natural disaster, which models from Japan's, should be established in Thailand.
2. Thailand should learn a lot from Japan.
  - 2.1 The rice planting project is inspired from visiting Japan last time: After I saw the children were planting rice on the roof of a high building in Tokyo.
  - 2.2 Thammasat University and Meiji Gakuin University have a lot in common. The students of Meiji Gakuin say “Do for others” , the students of Thammasat say “I love Thammasat, because Thammasat teaches me to love the people” . Therefore, we should learn more from each other. And about volunteer management and volunteer center, we have to learn from Meiji Gakuin University.

# パンガー県タクアパ郡バンムアン区タブタウン村のコミュニティー

—被災したモーケン民族の復興活動と問題点、今後の課題について

日本国際ボランティアセンター (JVC) タイ津波被災地復興支援 現地調整員 堤 由貴

## はじめに

JVC\* はスマトラ沖地震によるタイ南部大津波の直後から、タイの現地 NGO とネットワークを組み、復興支援活動を行ってきました。私は 2005 年 5 月初旬から約 1 年 7 ヶ月間、タイの南部を拠点とし、2004 年 12 月 26 日に発生したスマトラ沖地震の被害にあった 6 県の 20 村以上の被災地に駐在し、復興支援活動のモニタリングや被災者への聞き取りを行ってきました。さらに、被災住民が今までの支援以外で新たに（本当に）必要としていることはないかということも、同時に追ってきました。被災地では 2006 年 12 月 26 日で、津波発生から 2 年を迎えます。現在、悲しいことに、日本含め世界各地で地震やハリケーンなどの自然災害があまりにも頻繁に起きているせいか、市民の関心が薄れつつあり、スマトラ沖地震・津波のその後の状況は、ニュースなどではめったに報道されなくなりました。この約 2 年の間で、タイ南部の被災地における漁船修復、住宅再建などは順調に進んでおり、被災した住民も少しずつ以前の生活を取り戻しています。しかし一方では、緊急的な食糧支援が必要な被災した在タイビルマ人労働者の人たちや、元々住んでいた土地から強制退去を強いられている少数民族の被災者など、復興から取り残されている人たちがいるのも事実です。本日は、順調に復興を遂げているタイの被災地で、未だに問題を抱えている被災者の現状・今後の課題など、現場の生の声を、みなさんにお伝えしたいと思います。

## 1. タブタウン村について

(1) 基礎情報： 全体的な人口は約 300 人、82 世帯（政府からの支援が届かなかったコミュニティーは 47 世帯）、約 100 家族、このうち 9 割がモーケンという少数民族で、主な生計の手段は小規模漁業・日雇いの建設業などである。津波で住宅はほぼ全壊、村は崩壊し、死者も出た。

(2) モーケン民族について： モーケン民族は昔から海の上で生活していたため、Sea Gypsy（海の民）の一族とされ、独自の言語・文化を持ち、民族的な性格上、温厚で争いごとを好まない。昔は海の上だけで生活していたが、米を食べる文化や貨幣経済が浸透し始め、貝や魚を売って生活するため、陸に定住するようになった。しかし、彼らが定住し始めた当初、モーケン民族の多くは、タイ国民として認められにくかった（徐々にモーケン民族にも ID カードを支給する取り組みが始まった）。タイ国民としての ID カードがないモーケン民族は、タイでの医療サービス、労働、様々な情報源にアクセスできな

\* 日本国際ボランティアセンター (JVC) は、1980 年にインドシナ難民救済のため駆けつけた日本人の若者によりタイで立ち上げられた NGO。現在はアジア・中東・アフリカの 11 の国・地域で支援活動を行う。HP : <http://www.ngo-jvc.net/>

い（タイ語の壁もある）。

(3) モーケン民族の津波後の評価：「海の民」であるモーケン民族には、昔から「波が引いたら鬼が来る」という言い伝えがあった。そのため、津波が起こる直前、波が引いていくのを見て、陸にいたモーケン民族はすぐに高台に逃げ、人的被害は地元のタイ人よりもかなり少なかった。この事実を知った地元のタイ人の被災者はモーケン民族の伝統・知恵を尊敬するようになった。

さらに、モーケンの人々は、コミュニティーのつながりが強く、津波の被害で孤児になってしまった子どもも、集落の村人が協力して世話をし、前向きに生きている。このコミュニティーのつながりに関しても、タイ人コミュニティーは多くを学び始めている。

(4) 子ども財団（FFC：Foundation for Children）の活動：このコミュニティーの子どもたちのために児童館を設け、津波で両親を亡くしてしまった子どもの心のケアや学校での授業の復習、モーケンの伝統の歌や踊りの練習、お絵かき活動、野外活動などを行なっている。

## 2. タプタワン村の問題点と今後の課題

タプタワン村のモーケンの村人は200年以上前からタプタワン村に住んでおり、IDカードは支給されている（タイ国民として認められている）が、ある集落の村人は土地所有権を持っていない。行政に土地の登録をしておらず、それがなくても何の支障もなく生活できていたためである。彼らは元来、海を守るために伝統的な漁法で漁をし、沿岸のマングローブ林を保全し、また自分たちの住む土地においてもココナッツや薬草、花などを植え、自然と共生する形で生計を立ててきた。しかし、津波で集落ごと破壊されてしまった。そして集落が崩壊したのをよいことに、都市の資本家や仲買人らが、土地所有権を持っていなかった集落の村人の土地と、村人たちが漁船を着けている沿岸のマングローブ林の土地を勝手に売買し、そこにリゾートを建設する計画を始めた。モーケンの村人は、津波以前からこの土地で生活し、同時に沿岸のマングローブ林も守ってきたので、自分たちに土地の所有権とマングローブ林を管理する権利はあるということを主張した。そこで、資本家たちが土地所有に関してモーケンの村人（世帯主）一人一人に対して訴訟を起こし（47世帯中36世帯）、現在法廷に持ち込まれている。タイ国家人権委員会（The National Human Right Committee of Thailand）もこの件についてタプタワン村に調査に入り、土地所有権は村人にあることを主張した。現在、タイの現地NGOが村人と協力して、裁判のための書類作成、調査などを村人とともに進めている。タプタワン村の村人自身が土地所有権を獲得することは、彼らの今後の長期的課題であるとともに、村人が津波以前の平穏かつ安定的な生活を取り戻すために不可欠な課題である。

## アメリカ NPO ボランティアについて

アメリカ西海岸のサンフランシスコ・バークレー地域は、ボランティア活動が盛んな地域として知られている。ボランティアセンターでは昨年度に続き、文部科学省「特色ある教育支援プログラム」助成事業の一環として、今年度も「アメリカ NPO ボランティアプログラム」を実施した。アメリカでの受け入れ全般及びコーディネートに関しては、昨年度もお世話になった JPRN（日本太平洋資料ネットワーク）に依頼した。今回は派遣人数が 10 名から 20 名になったことから、より良いプログラム作りを目的に前回の参加学生たちにアンケートとヒアリングを行い、教訓と課題を把握した。結果、①事前のオリエンテーションと学習プログラムの充実、②渡米後の振り返りの充実、が検討課題として明らかになった。以上を踏まえて今年度は、プログラム内容を新たに再編した（図 1 参照）。本プログラムは事前の学習と準備から始まり、現地では環境や人権、福祉、町づくりなどの分野で活躍する NPO で実際ボランティア活動に参加してもらい、それを通じて参加学生たちに日米の異文化・社会問題について全身で学び、感じてもらうことを目的とした。また、コミュニケーションツールとしての英語の必要性を肌で感じる機会としてもらいたいと考えている。そして最終ステージである報告会及び報告書作成で、参加学生がそれぞれプログラムを通じて得た「学び」を確実にすることができると期待している。今年度の実施概要は以下の通りである。

【実施期間】 2006 年 12 月 9 日（土）～ 2007 年 5 月

（渡米期間：2006 年 2 月 13 日（火）～ 2007 年 3 月 14 日（水）30 日間。内 2 月 13 日～ 18 日までボランティアセンターからコーディネーターが同行・現地視察）

【参加人数】 20 名（男子 2 名、女子 18 名。1 年生 4 名、2 年生 16 名。文学部 7 名、社会学部 4 名、法学部 4 名、国際学部 3 名、経済学部 2 名）

2007 年 1 月現在、第 2 回オリエンテーションまで参加学生全員が課題をこなし、順調に進んでいる。引き続きプログラムの終了まで、学生たちに対する残りの事前準備、渡米中・渡米後のフォローと、現地受け入れ全般を引き受けてくださっている JPRN との密なコミュニケーションに努めたい。（李）

図 1. 2006 年度アメリカ NPO ボランティアプログラムの流れ





第1回オリエンテーション：2006年12月9日（土）白金校舎

・顔合わせ、 ・グループ分け※1、 ・事前課題の発表※2、 ・プログラム説明（バインダー配付）、 ・前回参加学生による報告&相談会※3、 ・グループ毎に役割分担の相談と決定、 ・自己紹介文の配付（提出は前日まで）※4

※1）現地でのミーティング、現地で披露するレクリエーションの準備のため4グループに分けた。

※2）事前課題内容（※これらの課題は提出後、ボランティアセンターでまとめて参加者に配付）

- ①英語の自己紹介プレゼン準備（3分程度）：第2回オリエンテーション時発表
- ②NPO やボランティアに関する英単語を調べる（一人15words）
- ③自分の希望するボランティア活動分野、または日本のNPO やボランティア全般に関する論文や書籍を読みレポート作成
- ④ボランティア活動先を自分で探し、日本で1回体験してレポート作成
- ⑤ボランティア学（水曜6限：白金）の聴講とレポート提出



第2回オリエンテーション：2007年1月13日（土）白金校舎

・旅行会社オリエンテーション、 ・英語プレゼン発表、 ・提出物コピー



第3回オリエンテーション：2007年2月2日（金）横浜校舎

・旅行会社オリエンテーション、 ・グループ別レクリエーション発表、 ・提出物コピー配付、 ・派遣先ボランティアマッチング結果配付



2007年2月13日（火）出発、3月14日（水）帰国

■ボランティア活動：ボランティア受入団体(分野)：子ども、高齢者、ホームレス、マイノリティ、貧困/災害支援、国際協力（難民支援）等。ボランティア内容は配食プログラムでの給仕・後片付け、ウェアハウスでの仕分け、製本、コミュニティアウトリーチ（ピラ配り）、子どもの遊び相手と引率、高齢者プログラムの手伝い等。2人または3人1組で行う。ボランティア先は一人2団体。

■その他のプログラム：パークレイウォーキングツアー、英会話講座（2回）、アメリカンコミュニティ体験（地元の学校見学）、フィールドスタディ（①UC パークレイ校キャンパスで地元の学生にインタビュー、②学生たちが現地NPO 団体をグループで訪問し、団体の資料を収集する）、フィールドトリップ（日帰り旅行。ゲイコミュニティを正しく学習するカストロウォーキングツアーなど）

■現地フォロー（JPRN 実施）：オリエンテーション（プログラム説明、自己紹介、滞在中の注意、現地生活指導、BART の切符の買い方、アメリカでボランティアを行う際の心構え）、中間ミーティング、反省会



帰国後全体ミーティング：2007年4月14日（土）白金校舎

・プログラムアンケート配付・ヒアリング ・報告会の打ち合わせ（※任意で渡米前に参加したボランティア先で1回ボランティア）



報告会・報告書作成：2007年5月下旬予定

## 企業・地域との連携

### 《ソニーマーケティング学生ボランティアファンド》

このファンドは、ソニーマーケティング株式会社の提案により、日本初の全国の学生ボランティアを対象とする「ファンド」として2001年に始まり、当初よりボランティアセンターが事務局を担当している。第6回目の募集となった今年度は、これまでの資金面での支援やグループ相互交流の機会提供に加え、新たにボランティアグループ活動を立ち上げる学生や、比較的費用のかからない草の根活動を行う学生の意欲を広くサポートするため、従来の助成金25万円コースに加え、10万円を上限とする応募コースが新設された。9月末に募集を開始し審査を経て、応募総数59団体の中から最終的には25万円コース21団体、10万円コース5団体、合計26団体が助成対象に決定した。これまで大都市圏に集中する傾向があった応募が全国に分散し、初めて応募のあった大学も7校あった。報告会が2007年6月に予定されている。

(武村)

### 《シチズンシップ・コラボレーションカレッジ》

今年度より、シチズンシップ・コラボレーションカレッジ（以下、CCカレッジ）が「NPOインターン・コラボ・プロジェクト（以下、NPOICP）」の2ndステージに位置づけられた。NPOICPは（特活）NPOサポートセンター、（特活）NPO支援センターちばがプロデュースし、（株）松下電器が特別協賛しているプログラムであり、NPO現場の実践力を活用した、社会全体でつくる学びの場をNPOと企業と一緒に作っていくことを目的としている。1stステージでは、NPO現場でのインターンがメインとなり、2ndステージではインターンで養った経験やスキルをフル活用し、企画をゼロから組み立てて完成させる作業になる（CCカレッジ）。2006年度のプログラムには、本学より2名の学生が参加しており、第1回オリエンテーションにはセンタースタッフ1名が学生とともに参加した。また、12月16日に行われた2ndステージ（CCカレッジ）では、白金校舎10階大会議場が会場となり、会場設営準備などの協力を行った。CCカレッジ本番では、ボランティアセンターからもセンター長始めスタッフからも学生や他の参加者たちと一緒に参加し、充実した時間を共に過ごした。

(李)

### 《地域学生わくわく交流祭》

ボランティアセンターでは、体育会学生と連携し例年11月に「地域学生わくわく交流祭」を実施してきた。体育会学生が地域貢献を考えた結果、「いざというときに備えて、顔の見える関係作り」をテーマとした祭りが企画された。横浜キャンパスは市の広域避難場所に指定され、災害時には学生と地域住民が生活をともにするなど、日頃からの大学、学生、地域との繋がりが必要とされている。そこで、体育会の得意とするスポーツを生かした、交流の場づくりと防災啓蒙の祭りがおこなわれることになった。2002年より実施してきたが、体育会学生がより主体的に地域と関わる体制を考え、またボランティ

アセンター学生スタッフは、春・夏に実施する「Let's Try! ボランティア」を中心として、学生スタッフ以外の学生も巻き込みながらわくわく交流祭で培った学生と地域との交流の進展を目指し、発展的に解消するに至った。この祭りの実施にあたって共催として関わっていただいた上倉田・下倉田連合自治会をはじめ、多数の団体、個人の方と協力関係が促進されたことに深く感謝し、今後もその関係がさらに発展することを願っている。

(市川)

## 聴覚障がい学生支援について

明治学院大学には現在3名の聴覚障がい学生が在籍している。本学では、かなり以前から聴覚障がい学生（利用学生）を受け入れていたが、大学としての支援体制は十分でなく、授業における情報保障の手段としてのノートテイクや手話通訳者も利用学生が手配するという状況であった。これを踏まえ、ボランティアセンターでは、今年度より、長年本学で地域ボランティアとしてノートテイクを担当してくださった方をノートテイク・コーディネーターとして迎え、聴覚障がい学生支援のコーディネート全般をお願いすることとなった。具体的な内容としては、①ノートテイクや手話通訳者の登録制度の実施、②授業におけるコーディネート、③ノートテイク養成講座の実施（5月と10月に開催。それぞれ2日間連続受講の形式とし、2日間の受講時間は合計6時間）、④ノートテイク初心者への個別研修の実施、⑤昼休みを利用したノートテイク初心者反省会の実施、⑥ノートテイク要約勉強会の実施、などである。

これらの活動を通して得られたこととしては、①登録制度の開始により、利用学生が自分でノートテイクなどを手配するという状況が解消され、利用学生の負担が軽減した、②コーディネーターの着任により、利用学生およびノートテイクそれぞれが抱える悩みや問題について専門的な立場から指導できる体制が整えられた、③講座や勉強会の実施にあたって、必ず利用学生にも声をかけ、ノートテイク同士、ノートテイクと利用学生との交流の場を設定したことで、相互理解を深める機会となった、などが挙げられる。特に③に関しては、学生主体で交流の場を持ちたいという動きが学生達の間から出始めており、「自主的に考えて行動する」という学生育成の観点からも、ボランティアセンターとして今後の動向を見守っていききたい。

なお、得られたこともあった反面、ノートテイクや手話通訳者を受け入れる体制や資金面での問題など明らかになった点もある。たとえば、ノートテイクや手話通訳者の人員確保に関して、学内での学生ノートテイク養成には限界があり、この場合、地域の方に依頼する必要がある。地域の方へ依頼し現行の謝礼取扱い基準に従うと、決められた予算の上限内ではおさまらないため、利用学生が本人の裁量で予算をやりくりしなければならないという現状がある。人員確保と謝礼の問題は表裏一体にあり、他大学と比較しても、本学の資金面での支援は十分であるとは言い難い。大学としてどこまで保障するのか、あらためて考え直す必要性を感じる。ボランティアセンターとしても、実際のコーディネートに携わる立場から、関連部署と連携をとりながら検討していききたい。

いずれにしても、聴覚障がい学生を受け入れた以上、大学の責任として、学生生活を円滑に過ごせるよう体制を整えていく必要がある。ボランティアセンターとしても、よりよい支援体制が築けるようさらに努力していききたい。

(武村)

## 白金校舎学生スタッフ活動報告

2006年度、学生スタッフの活動は大きく発展した。これまで学生スタッフの活動は横浜校舎を中心に行われることが多く、白金校舎での活動は思うようにできていなかったが、今年度はスタッフ同士の協力により白金校舎でも幅広い活動を行なうことができた。

2006年度 白金校舎学生スタッフの主な活動

5月13、14日	ボランティアセンター研修合宿
5月30日、6月1日	心理学科対象学生スタッフ説明会
6月7日	ボラセンカフェオープン
6月17日	第5回ソニーマーケティング学生ボランティアファンダ報告会手伝い
7月4日、7日	Let's Try! ボランティア in Summer 説明会
8月2、3日	Let's Try! 引率ボランティア in こびあクラブ
8月10日	Let's Try! 引率ボランティア in 上池台児童館
8月11、12日	Let's Try! 参画ボランティア in 白金の森「花鳥風月」
8月18日	白金校舎春学期反省会
11月8日	学内のゴミ分別プロジェクト
11月12日	第1回 白金校舎学生スタッフ研修会
11月30日	筑波大学、清泉女子大学がヒアリングに来室
1月11日	Let's Try! ボランティア in Spring 説明会
2月	秋学期反省会
2月17、18日	Let's Try! 引率ボランティア in 東京マラソン
2月20日	第2回 白金校舎学生スタッフ研修会
3月	ボラセン通信発行・発送

まず、活動を活気づけるきっかけとなったのが心理学部スタッフの加入である。少し遅れはしたが6月に2度の説明会を行い、その後に申込用紙を提出してもらうという形で募集を行なったところ、1、2年合わせて11名のメンバーが加わった。

このメンバーに対して私達の過去、現在の活動を毎週火曜日に行なわれるミーティングで伝えてきた。また、ミーティングの短い時間だけではなく本格的に私達の活動基盤である「ボランティア」を考えるための「白金校舎学生スタッフ研修会」を11月に行なった。内容はアイスブレイキングに始まり、コーディネーターからのボランティア講座、事前に新スタッフが共通の

本を読みグループごとに発表し合いそれに対するディベート、上級生スタッフからのアドバイスなどを盛り込んだ。新スタッフと上級生スタッフとの距離が縮まり、ボランティアに対する知識や経験を共有できた。

このように普段のミーティングや研修会を経て、新スタッフが私達の活動を少しずつ知り、上級生スタッフと一緒に活動するようになっていった。そこから生まれた代表的な企画が今年度から新しく始まった企画でもある「ボラセンカフェ」「学内のゴミ分別プロジェクト」そして「第2回白金校舎学生スタッフ研修会」である。

特に「第2回白金校舎学生スタッフ研修会」は、上級生スタッフが行なった研修会を経て、今度は新スタッフを中心となって開催したものである。新スタッフが自分達に必要なスキルを磨こうとプログラム作りに積極的に取り組んだことや、今後の活動に対して模索をしようとする意欲を見せたという意味では学生スタッフとして頼もしく、今後の活動にとっても期待できる。今後もその時々で必要な内容を盛り込んだ研修会を定期的に行なっていく。

カフェのように気軽に立ち寄れて、メニューを選ぶようにボランティアを気軽に選んで活動してほしいという願いが込められたネーミングの「ボラセンカフェ」。これは学内におけるボランティア活動を推進する

ため、またボランティアセンターの周知を図るため、昼休みパレットゾーン（福利厚生施設）2Fで行なわれた。学生スタッフがボランティア相談を行うことはもちろん、ボランティアのメニューをわかりやすく、QRコードを取り入れるなど工夫をこらしてボランティア情報を発信したこともあり、ふらっと立ち寄る学生が多くいた。今後は学生同士の交流、講習会などを行なっていこうと考えている。



「ボラセンカフェ」オープン！

また、私達の積み上げてきた信頼関係が、新たな取り組みへ発展した「学内のゴミ分別プロジェクト」。一人のスタッフが感じていた大学内のゴミ問題が、他のスタッフへ影響を与え、スタッフ内で活動の模索をしていたところ、学内環境サークルと協同行なおうと話が発展した。このサークルとは今までそれぞれの企画に参加しあうといった接点はある、そこでの信頼関係が今回のような協同行企画に発展した。新入生オリエンテーションにおいて分別を呼びかけることを企画中である。

そして、最後に長期休暇前に行なっている「Let's Try! ボランティア」を新たに白金校舎でも行えたことも特筆すべき点であるが、その中の企画で一般学生を巻き込んだ参画型ボランティア「花鳥風月」を実施したことについて書きたい。花鳥風月は、学生スタッフの呼びかけにより集まった学生がそれぞれ持ち前の個性、スキルを生かして一緒にボランティアのプログラムを一緒に作るという企画である。学生スタッフ自身が協力施設を探し出し、一般学生からメンバーを募り、プログラム運営のリード、当日の司会進行などを行なったという点が画期的であった。

初めて顔を合わせるもの同士がすぐに打ち解けられるようにと導入したアイスブレイキングの知識は学生スタッフとしての活動をしてきたからこそ得られたこと、参加者の個性や得意としている面を引き出し、参加者の自主性を尊重した進行ができたことは日々のコーディネート活動、ミーティングでの経験が活かされたといえる。何日も遅くまで大学に残り準備した甲斐もあり当日は音楽、歌、踊りを取り入れ参加者、施設の方々と大喜びだったことから大成功を取ることができたと思う。

今年度は学生スタッフとして大きく飛躍できた。学生スタッフの活動拠点が白金・横浜校舎の2箇所になり新しいメンバーを迎えたことはもちろんその要因として考えられる。しかし、こうして飛躍できたのはセンター職員の方々を始めとし、私達の企画に対してご協力をいただいた全ての方のおかげである。文末ではあるが感謝の意を表したい。



花鳥風月のメンバーと協力してくださった施設の方

（白金校舎学生スタッフチーフ3年 川勝 亮介）

## 横浜校舎学生スタッフ活動報告

2006年度は学生スタッフの原点に立ち返り、「もっと多くの学生にボランティア活動に取り組んでほしい」という目標を掲げ、4月に加入した19名の新スタッフとともに、活動に取り組んできた。以下に横浜学生スタッフの主な活動について、日常的に行う活動と企画・イベント系の活動の2つに分けて報告する。

### 1. 日常的に行う活動の報告

#### 【ボランティアコーディネート】

当初から今年度の目標として実施していくことを考えていた活動で、学生スタッフがボランティアセンターに来室する学生にボランティア情報を紹介したり、相談に乗ったりするというものがある。これまでも学生スタッフがボランティアセンターに居るときは不定期に対応をしていたが、定期的には行えていなかったことから、本年度からは「学生スタッフ対応時間」を設定し、定期的に学生の対応をする時間を設けた。春学期はコーディネーターと協議を重ね、秋学期から1年生スタッフが中心となって本格的に活動し、週二回火曜日と金曜日の昼休みに実施した。

ボランティアコーディネートに関しては初心者の学生スタッフだったが、回数を重ねるごとに経験を積み、コーディネートをすることに喜びや楽しみを感じることができたようである。しかしその一方で、「コーディネート記録」などの情報共有ツールが活用しきれなかったことや、それにより問題や課題をスタッフ同士が次に生かせなかった事など、課題も残る結果となった。学生スタッフの活動の基礎となるこの活動を、今後もより良い形になるよう試行錯誤しながら、発展させていってほしいと思っている。

#### 【分野別ボランティア情報チーム活動】

この活動は、ボランティアセンターに集まる数多くのボランティア情報の中から、学生スタッフの関心の高い5分野（①高齢者関連、②障がい者関連、③国際関連、④子ども関連、⑤地域・音楽・芸能関連）について、3～5人ほどのチームに分け、担当する分野の情報を専用の用紙に「学生スタッフおすすめ情報」として記入し、ボランティアセンター入口付近に設置されている、外を歩く学生から見える位置にある掲示板に掲示するものである。月2回更新を行った。この活動に際し掲示板の装飾も行い、学生の目につくように配慮した。

### 2. 企画・イベント系活動の報告

#### 【ボランティア系サークル合同説明会】

毎年4月におこなっているもので、明治学院大学のボランティア系サークルや、地域のボランティア団体などが一堂に会し、新生に活動紹介や情報提供をおこなうことで、ボランティアに関心をもってもらうという企画である。今年度は、昨年度よりも内容を充実させ、従来通りの説明会に加えてブース形式のサークル紹介も行い、数多くの学生の来場があった。新生にボランティアに触れる機会を提

供するのは非常に大事な事だと思うので、今後も継続して実施していければと思う。

#### 【Let's Try! ボランティア】

昨年度の成功を生かし、今年度も夏と春の二回実施した。この企画は、「ボランティア活動はしたいけれど、どうしたらいいかわからない、参加する勇気がでない」という学生の後押しをすることを目的に、学生スタッフが受け入れ先との調整、学生への広報、事前説明会、当日までの全てをサポートするもの。これまでに農作業ボランティア、地域ケアプラザで行われる障がい児余暇支援イベントへの参加、学内サークルと協力して、活動に参加させてもらったり、手話講座を開いたりもした。今年度は、夏には農作業ボランティア、地域ケアプラザで行われる障がい児余暇支援イベントへの参加、そしてボランティア情報の提供、という内容で行った。毎回説明会には多くの学生の参加があり、ボランティア活動への関心の高さが伺え、現在では学生スタッフの中心的な活動の一つとなっている。

しかしながら、企画を行う上で、相手方との連絡体制や、情報の安全性などの問題も生じている。企画側として、相手方や学生に迷惑をかけないようにするためにも、企画をさらに発展させていくためにも、しっかりとした体制作りや、企画立案が必要であり、どう発展させていくか今後の展開に期待したいと思う。

### 3. 今年度の活動を通して

一年間活動をしてきて最も考え、思慮をめぐらせたのが「学生スタッフとしての自由と責任」ということである。学生スタッフの活動には「これをすればいい」という決まったものはない。その点自由に活動することができるし、学生の考えや思いが活動に反映される。しかしその一方でボランティアセンターという大学の機関の一員として、活動に対して果たさなければいけない責任も学生スタッフは持っていると思う。学生スタッフの活動は「ボランティア」であり、本人の興味や関心からくる自発的な意志によって活動が成り立っている。つまり、活動に参加するもしないも、また何をするのも個々人の意志に委ねられているということである。自分から発信していかなければ何も始まらない。しかしその一方で、現実的には受身的なスタッフが多い事実がある。そのため自分が参加する活動が無ければモチベーションは下がる一方で、活動を行わないまま時間だけが過ぎていってしまうという状況が生じる。

そこで問題となるのが「学生スタッフの自由と責任」ということである。学生サークルではない、大学の機関の一員である我々が自由に活動するという事は、その分自分たちで活動に対しても、活動に関わる全てに対しても責任を果たさなければいけないという事だと思う。自分達が果たすべき責任、それは自分たちができる範囲の中で、活動に積極的に参加する事、活動について考える事、そして自分から活動を創っていく（行動する）事だと思う。組織が大きくなり、薄れてしまった学生スタッフの基盤とも言えるこの事を、再度確認し、活動をする必要があるのではないかと思う。

(横浜校舎学生スタッフチーフ2年 石阪 啓介)

# 明学グッズ・ボランティアファンド

——ファンド・レイジングによって広がる活動の可能性

## 1. 「明学グッズ・ボランティアファンド」について

2005年秋、大学がおこなっているブランディングプロジェクトの一環として、明治学院大学ボランティアファンドの取り組みが始まった。これは大学生協で販売するグッズの開発に際し、大学と社会とを結びつける方法のひとつとして考案されたアイデアであり、グッズの本体価格10%をファンドとして積み立て社会貢献に運用する仕組みである。運用方法については2005年秋から配布されている、「ボランティアファンド支援グッズ」を説明する黄色いコースターの説明に次のようにある。

「明学グッズ・ボランティアファンド」は次のように運用されます。

① 大規模災害の被災者への支援

② 明治学院大学ボランティアセンターが企画する環境保護活動への支援

ブランディングプロジェクトを率いるアートディレクターの佐藤可士和氏がデザインした「明学グッズ」は、文房具からアパレル、菓子、記念品にまで至る。2007年1月現在、30種類近くの品がそろっている。学生生活に身近な商品を中心に開発されており、とりわけビニールバッグやクリアファイルが人気を集めているという。ファンドの積立金額は、大学ホームページでも報告されているとおり、2005年10月から2006年3月までは335,838円、2006年4月から2006年9月までの上半期は500,545円となっている。

明学グッズ・ボランティアファンドというこの企画に関し、ボランティアセンターではファンドの運用の方法について、2006年度の会議にて慎重に議論を重ねてきた。その結果、ファンド総額の半額程度を限度に、大規模災害の被災者への支援をできるだけおこなうこと、また環境保護活動への支援についても残りの半額程度を目安とし、協議の上、あらたな企画をボランティアセンターとして提案することを決定した。

## 2. 大規模災害の被災者への支援

国内外で起こる大規模災害の被災者への支援は、これまで、その都度、募金箱を設置するなどして対応してきた。今年度は同様の対応に加え、ボランティアファンドから積立金の一部を義捐金とした。2006年度におこなった募金は、2006年5月27日に発生したジャワ島中部地震および2006年7月17日に発生したジャワ島沖地震・津波での被災者支援を目的とするものである（2007年1月現在）。両件について、関係者の皆様のご協力のおかげで、多額の義捐金を送付することができた。義捐金の送付先については、国際的な災害支援をおこなう際の日本国内での窓口となっている日本赤十字社および明治学院大学が研修生を派遣するなど関わりのある国連WFP協会の2団体を中心とすることとした。2件の募金についての詳細は次のとおりである。

(1) ジャワ島中部地震

募金期間：2006年5月30日～6月19日

義捐金総額：30万円

【内訳】 募金より：242,132円 ボランティアファンドより：57,868円

義捐金送付先：日本赤十字社 150,000円 国連 WFP 協会 150,000円

(2) ジャワ島沖地震・津波

募金期間：2006年7月24日～7月31日

義捐金総額：10万円

【内訳】 募金より：19,281円 ボランティアファンドより：80,719円

義捐金送付先：国連 WFP 協会 100,000円

3. ボランティアファンド・学生チャレンジ賞について

「明学グッズ」の売り上げ10%が積み立てられるボランティアファンドの半額程度を、どのようにして環境保護活動に対する支援に当てるのかについても、ボランティアセンターで審議を重ねてきた。その結果、賞を設置し学生たちの活動を支援してはどうかという企画を考案し、運営委員会でも賛同を得、「ボランティアファンド・学生チャレンジ賞（通称ボラチャレ）」がスタートした。折しも、学生の自由な活動を支援する学内のファンドであった「学生へボンチャレンジ賞」(保証人会主催)や「山崎美貴子賞」(宗教部主催)といった賞がそれぞれ終了していたこともあり、学生たちのボランティア精神を支援し、社会に貢献する人材と活動を育てるために活用したいという意図も込められている。

このファンドは、今まで活動してきた団体、またこれから活動を始めたいと願っている団体に「環境保護」に関連する企画案を応募してもらい、企画の実現を支援するプログラムである。条件は二つ。ひとつは明治学院大学の学生による団体であること。もうひとつは活動範囲が白金校舎および横浜校舎やその近隣、あるいは大学ゆかりの地（小諸市など）であること。書類審査と公開審査を経て、合計3団体ほどに8万円を上限とする奨励金を授与し、活動報告書を作成してもらう予定である。応募から受賞までのタイムスケジュールは次のとおりである。

<スケジュール>

応募要項配布 2006年12月8日（金）よりボランティアセンター（白金校舎・横浜校舎）にて配布

応募期間 2007年4月2日（月）～2007年5月7日（月）

書類選考 2007年5月中旬

公開審査 2007年6月2日（土）予定

活動期間 2007年6月から2008年3月

現在は応募要項の配布を開始した段階で、実際の応募は次年度に予定されている。どのような団体がどのような企画で参加してくれるのかは未知数であるが、地道に取り組むことのできる身近なボランティア活動が、このファンドをきっかけに学内で始まり、根付いてくれればと願っている。

#### 4. ファンド・レイジングによって広がる活動の可能性

ボランティア活動を立ち上げようと思いついてもそれを諦めてしまったり、何かを始めたとしてもやめてしまったりする人たちにとって、活動資金の不足が問題となる場合が少なくない。明学グッズ・ボランティアファンドは、このような悩みを解消する可能性をもつ。今年度、大学が明学グッズを用いたファンド・レイジングの仕組みを整えてくれたおかげで、ボランティアセンターとしても、被災者支援に対し、一定の義捐金を拠出することが可能になった。また、環境保護活動に関するボランティア活動を始めたり続けたりしたいと願う学生たちの思いに応えることが可能になる。そしてさらに重要なのは、ボランティア活動に関心のない人にとっても、毎日何気なく使っている日用品の購入が結果的に誰かの役に立っているのだと意識できるという点にある。

明学グッズ・ボランティアファンドによって広がるボランティア活動の可能性が、これまで以上に実りあるものになるよう、この仕組みを周知し適切に運用できるよう、ボランティアセンターとしても来年度に向けてさらに力を注ぎたいと考えている。

(坂口)

## ボランティアセンター関連講座

ボランティアセンターは、市民活動、福祉、国際、政治などの現場とネットワークを結びながら活動をおこなっている。その特色を生かし学部学科とボランティアセンターが連携して開講されているのが政治学科専門科目「フィールドワーク」である。この授業では学生自らが政治的テーマを設定し、現場に赴き参加調査することによって、政治現場の一端を経験し、政治学的に考察をおこなうことが目的とされている。学科の専任教員とともにボランティアコーディネーターが担当することで、学生はボランティアセンターがもつネットワークを活用しながら、調査を進めることができる。今年度は「保育園の民営化問題」「ホスピス病棟の成り立ちと役割」をテーマとした学生がボランティア活動を通じて現場に参画し、調査をすすめた。調査の結果は、「フィールドワーク発表会」及び1万字以上の「レポート」として報告される。(市川)

2006年度から全学部・学科生対象の明治学院共通科目として「ボランティア学」が開講されるようになった。今年度は横浜キャンパスで春学期に「ボランティア学1」(246名が受講、以下同様)、秋学期に「ボランティア学2」(181名)、白金校舎で「ボランティア学3」(同様のものを春・秋に開講、春22名、秋21名)を各1コマ開講した。ボランティア学1の講義レポート作成のため実際のボランティア活動に従事することを求められた学生がボランティアセンターに来室、当方ではボランティア情報提供や図書の貸し出しを行った。ボランティア学3は外部からの講師を招いたチェイン・レクチャーの形を取った。この講義の母体となったのが、昨年度ボランティアセンター主催で開講した「次世代育成～リーダー講座」である。

また、ボランティアセンター主催企画からの発展として、横浜市国際交流協会(YOKE)および本学教養教育センター共催の連続公開講演会(11月29日～12月1日)「地球規模の課題と向きあう」が催行された。ボランティアセンターがYOKEと共催する「国際交流・協力機関 体験・研修プログラム」(6ページ参照)を通して培ってきた良好な関係のもとに可能となった企画である。同プログラムにおける学生受け入れ機関のうちWFP、FAO、YOKEから担当者が来学し活動および使命について語り、連日50名以上の熱心な聴衆を集めた。この連続講演会は春期「国際交流・協力機関 体験・研修プログラム」の応募期間に合わせて行われ、講演会をきっかけに関心を持った学生がボランティアセンターを訪れる、プログラムに応募するなどの付随効果もあった。YOKEおよび教養教育センターでは、2007年度にも新しい企画開催を検討中である。ボランティアセンターはひきつづき主に広報面での協力を行う。

2007年度にはボランティア学担当の専任教員が着任し、ボランティア実習を伴う教養教育特別プログラム(明治学院共通科目内)が開始する。ボランティア情報を求めてセンターに来室する学生の増加が見込まれるのみならず、ボランティアセンターと教育部局との協働の新しい形が模索されることになるだろう。(三角)